



開館20周年記念

すべてのものと
ダンスを踊って
—共感のエコロジー—

2024年11月2日(土)～
2025年3月16日(日)

展覧会名	開館20周年記念 すべてのものとダンスを踊って—共感のエコロジー		
会期	2024年11月2日(土)～2025年3月16日(日)		
休場日	毎週月曜日(ただし11月4日、2025年1月13日、2月24日は開場)、 11月5日、12月29日～2025年1月1日、1月14日、2月25日		
開場時間	10:00～18:00(金・土曜日は20:00まで) ※観覧券販売は閉場の30分前まで		
会場	金沢21世紀美術館 展示室5～14、交流ゾーン		
作家数	60組10以上の国と地域	作品数	203点
料金	一般 1,400円(1,100円) / 大学生 1,000円(800円) / 小中高生 500円(400円) / 65歳以上の方 1,100円 ※本展観覧券は同時開催中の「コレクション展」との共通です ※()内はWEB販売料金と団体料金(20名以上)		
主催	金沢21世紀美術館[公益財団法人金沢芸術創造財団]		
助成	令和6年度 文化庁 我が国アートのグローバル展開推進事業、日本万国博覧会記念基金、 在日フランス大使館/アンスティチュ・フランセ		
協賛	エルメスジャパン株式会社、株式会社メルコグループ、アルスコンサルタンツ株式会社、 株式会社テクニカルアイ、株式会社 エイ・エム、ワイドクラフト株式会社、 エステックホールディングス株式会社、株式会社Tocasi、株式会社LINNAS Design、 OMO5金沢片町 by 星野リゾート、テロイトトーマツグループ、株式会社太陽テント北陸、 株式会社 中川ケミカル、Veuve Clicquot		
協力	総合地球環境学研究所(上廣環境日本学センター)、国立民族学博物館、 在日オーストラリア大使館、株式会社資生堂、三菱ケミカルグループ株式会社		
後援	駐日ブラジル大使館、在日イタリア大使館、趣都金澤、北國新聞社		
企画	金沢21世紀美術館 長谷川祐子、池田あゆみ、本橋仁 コ・キュレーター エマヌエーレ・コッチャ		
お問合せ	金沢21世紀美術館 TEL: 076-220-2800		

本資料に関する
お問合せ

金沢21世紀美術館 担当学芸員: 長谷川祐子、本橋仁、池田あゆみ
広報担当: 吉富智大、石川聡子、落合博晃
〒920-8509 金沢市広坂1-2-1
TEL 076-220-2814 FAX 076-220-2802
<https://www.kanazawa21.jp> E-mail: press@kanazawa21.jp



20th Anniversary

展覧会概要

見知らぬ他者に、おそろおそろさしだす手。

いっしょに踊りませんか？

「すべてのものとダンスを踊って—共感のエコロジー」展は金沢21世紀美術館の開館20周年記念として開催されます。当館の年間テーマである「新しいエコロジー」は社会や精神、情報を含む総合的なエコロジー理論であり、本展はこのテーマに基づきアーティストの鋭敏な感性と観察のもとに制作された作品を展示します。さらに本展では、同じヴィジョンを共有する科学者や哲学者などの研究者とも協働し、専門的な調査結果や理論を視覚化、可感化することで、感覚を通じた学び (Sensory Learning) としてみなさまに伝えます。

アートは美と技によって見えないものを見えるようにする魔術です。一方で、デジタル化によってすべてが記号化された現代では、見えているものを見えにくくする魔術としても機能します。脱記号 (脱言語) 化された価値観の転換は、脱人間中心主義にもつながります。

動物や植物や身近に転がるあらゆるモノたちを含む複数のヒューマニティの可能性を探る方法はなんでしょうか？かつて私たちは言葉が生まれる以前、身体の動きや意味なき音声によって互いに分かり合い、相互扶助、共生をしていました。それは目を合わせ、手をあわせ、リズムを共有し、共振すること。それはつまり「踊る」とことでした。動植物も人間も隔てなく協働し交感する。またセンサーや先端の技術で調査したデータに感情や感性を吹き込む。あるいはデジタルと物質の間を行き来する転移の過程で語られる未知の物語。そして物質の魔術的な変容がみせる驚き。すべてのものが動き出し、つながり、変わりながら踊りはじめます。

ダンスのためにさしだす手は、世界規模の課題に対する一当事者としてのアクションの第一歩です。そうして、共に踏むステップはコンピビアルな社会の創造、次の世紀に向かうリズムを奏でます。

辺境を含めたアフリカ、南アメリカ、アジア、欧米の59組10以上の国と地域の芸術家、クリエイターが集い、美術館空間の中でお互いにダンスを踊るように、生きることの美しさを感じるための知恵と生命を分かち合いましょ。禅を研究した鈴木大拙、また相互関係に重きをおいた西田幾多郎を生んだこの金沢の地で、自然や見えない存在との交感を通して、みずからもエコロジーの一端にいることを確信してもらえたら。すべてのものを包摂するヴィジョンが共生のプラットフォームとなります。

はい、わたしでよろしければ。

展覧会キュレーター 長谷川祐子

エマヌエーレ・コッチャ

池田あゆみ

本橋仁

展覧会の特徴

踊るためのプラットフォーム

私たちが住むこの惑星、地球が危機に直面しているいま、全ての他者 (マルチスピーシーズ) と繋がりたい。言葉を超えて共感する方法としてのダンス、本展ではアートがそのダンスのためのプラットフォームとなります。グローバルに活躍する現代アーティストや、アマゾンの先住民、金沢の華道家らによる多様なアートがうみだす活力とエネルギーの感覚「パイブ」が、見るものを共感のダンスに誘います。

学びの場所としてのプラットフォーム

アーティストと、文化人類学者や科学者、建築家との領域を横断した協働によって、現代アート作品と、専門性の高い情報を直感的に感じられるように展示します。美術館を感覚を通じた学び (Sensory Learning) の場とすることで、新たなエコロジー理論と実践について、ディスカッションやワークショップなど通して会期中展開します。

伝統と現代の出会いのプラットフォーム

輪島塗、珠洲焼、九谷焼。当館では、元日の能登半島地震で被災して金沢に避難している輪島塗の職人が、震災で破損した焼き物を漆と金を用いて修復する技術「金継ぎ」によって新しい形に再生するプロジェクト「rediscover」を美術館で展示します。ナイジェリア出身のアーティスト、オトボン・ンカンガ氏は、地元の複数の工芸作家と協働し、彼らの物語をかたる彫刻をつくります。現代アートによって伝統が再発見され、新しい創造が生まれます。

コ・キュレーター

エマヌエーレ・コッチャ / Emanuele Coccia

2011年よりパリ社会科学高等研究院 (EHESS) 准教授。ブエノスアイレス、コロンビアNY、ハーバード、ミュンヘン、ヴェネツィア、東京、ワイマールの各大学で客員教授を務める。著書に La trasparenza delle immagini (2005) や、Angeli (ジョルジョ・アガンベンとの共編、2012) など中世の哲学・神学研究、近年は『植物の生の哲学 混合の形而上学』(勁草書房、2019)『メタモルフォーゼの哲学』(勁草書房、2023) など独自の生命哲学で注目を浴びている。ヴァンサン・ゾンカ『地衣類、ミニマルな抵抗』宮林寛訳 (みすず書房、2023) に序文執筆。近年の活動としてパオロ・ロベルシとの共著『Lettres sur la lumière』(Lettres sur la lumière, Gallimard, 2024)、グッチの元クリエイティブ・ディレクター、アレクサンドロ・ミケーレとの共著『The Life of forms. Philosophy or Re-enchantment』(同、2024年) を執筆。2019年、パリのカルティエ現代美術財団で開催された「Nous les Arbres」展に貢献。第23回ミラノ・トリエンナーレ建築・デザイン展：Unknown Unknowns. An Introduction to Mysteriesのカタログを編集。

出品予定作家
(姓のアルファベット順)

マリア・フェルナンダ・カルドーゾ、道念邦子、オラファー・エリアソン、フォルマファンタズマ、AKI INOMATA、エヴァ・ジョスパン、カプワニ・クワンガ、ステファノ・マンクーゾ、オトボン・ンカンガ、PNAT、Rediscover project実行委員会、ティネ・ソールキア・レイングオー、アドリアン・ヴィラー・ロハス、佐藤浩一+梅沢英樹、新城大地郎、床州生、ソーレン・ソールキア、YANTOR

[アマゾンなどの作家]

エファシオ・アルヴァレス、ヤイーラ・エウアナ、フロリベルタ・フェルミン、シエロアナウェ・ハキヒュイ、クレメンテ・フリウス、ジャイダ・イスベル、エステバン・クラッセン、イバン・フニ・クイン、アセリーノ・フニ・クイン、パネ・フニ・クイン、ヤカッ・フニ・クイン、オズヴァルド・ピトエ、ジョゼッカ・ヤノマミなど

[北西海岸先住民の作家]

フブクアットチュ(ロン・ハミルトン)、リチャード・ハント、サイモン・ルーカス、ティム・ポール、アート・トンプソン、ショーン・フーノック

[イヌイットの作家]

アニングネーク、ソロシルツ・アショーナ、アヴァーラキアック・アヴァラキアク、イクシラック、
トマシー・イルフミア、カンゲルユアック、キーレーメウミー、コケーヤウト、ジョシー・ナツパツク、
ジェシー・オーナルク、ジョシー・P・パピアルク、ピツィウラク、オショーチアク・プッラット、
パドロ・プッラット、ルーシー・ケンノアヨアク、イカユクタ・トゥンニツリー、ウクパティク

[東アフリカの作家]

Kalembo、ノエリ、ピーター

[プロジェクト]

アニマ・レイブ:存在の交差点で踊る

(総合地球環境学研究所、能作文徳、常山未央、保良雄、澤崎賢一、ガラージュ、藤枝守 他)

[ワークショップ]

マヤ・ミンダー

作家紹介

PNAT

2014年設立、フィレンツェを拠点として活動

PNAT (Project Nature) は自然環境と人工環境の間の相互交換を引き起こすことを目的とする、フィレンツェ大学に属するスピンオフ企業です。科学者であるステファノ・マンクーゾ教授が率いる国際植物神経生物学研究所 (LINV) で実証された実験結果をデザイナーと植物科学者のシンクタンクであるPNATが実用化します。都市環境におけるライフスタイルを改善するために、空気清浄装置「ファブリカ テラリア」など植物研究に基づいた革新的なソリューションとコンセプトを開発しています。

本作《Talking God (神と話す)》は、金沢市内の神明宮に生きる樹齢約1000年の大ケヤキの生体信号を受信し、展示室内のモニターに映像で表現するインスタレーションです。ケヤキにつけたセンサーが植物の生体信号をリアルタイムにセンシングし、モニター上の神秘的な光の変化として表現します。植物は知性を持ち、神経作用を行っているというマンクーゾ教授の研究成果を、テクノロジーを用いて、美的な植物との交感の体験にまで高めています。



Fabbrica dell' Aria© PNAT
2023
©photo Takumi Ota



展示風景

カプワニ・キワンガ / Kapwani Kiwanga

1978年 カナダ・ハミルトン生まれ、パリ在住

キワンガはモントリオールにあるマギル大学で人類学と比較宗教学を、パリ国立美術学校で美術を学びました。独自の構成によって素材にまつわる歴史を別の視点から浮かびあがらせる作品は、既存の構造を異なる視点から見つめ、未来を異なる方法で切り開く道筋を見出すことを可能にしています。その作品は素材とその素材の社会的、歴史的な由来を脱植民地研究や人類学的考証をへて構築されたものであり、彫刻、インスタレーション、写真、ビデオ、パフォーマンスなど多岐にわたります。

本作《ヴンビ》(スワヒリ語で埃)は、彼女の祖先の出自であるタンザニアの森の茂みの前で、乾季に風景を覆ってしまう赤い埃で汚れた葉っぱを、カプワニ自身が一枚一枚タオルを使って丁寧にふきとっている場面を撮った映像です。すぐに新しい埃で汚れてしまう葉っぱを拭き続ける行為は無益で馬鹿げてみえるかもしれませんが。しかしながら映像のなかで少しずつ広がる緑と赤の強いコントラストによって、アーティストの小さなアクションが世界を変える希望のビジョンを感じさせます。

道念邦子/ Kuniko Donen

1944年 石川県生まれ、同地在住

道念邦子は華道家であり、古流の家元での稽古からはじまり、1970年代より、華道界での活動から前衛の道へと独自の花仕事を展開してきました。彼女は、屋外を含めたさまざまな場所で、植物の生命力を「華道」というわずかな時間において顕現する形式で表現してきました。「植物を手で触れて特性を見つけて、どのようにするかをそこから考えます」と語る道念は、花を活ける、ゆえに我ありといった存在論を持っています。展示作品《孟宗竹 キューブ》は、1988年に尾山神社の階段で、サイトスペシフィックなインスタレーションとして発表した作品の再制作となります。背の高い竹を切り出し、根本から頂端までの太さを可視化するために、それらを高さによって分断し、立方体としてまとめます。太い根本をまとめたキューブは大きく、頂端は細い竹を束ねるゆえに小さくなります。異なった大きさの複数個のキューブは、自然の形の秩序を近代彫刻の幾何学的フォルムに翻訳し、配置したものとイえます。それは私たちに自然の美のシンプルさと論理を教えてくれるかのようです。



道念邦子《房咲水仙2》1989
作家蔵
撮影：池端 滋



展示風景

YANTOR(ヤントル)

坂倉弘祐：1986年 山口県生まれ

吉田賢介：1983年 東京都生まれ

東京を拠点にファッションブランドとして2008年より活動開始

YANTORは、デザイナー/ディレクターの坂倉弘祐とパタンナー吉田賢介が2008年に立ち上げたファッションブランド。ファッションを場所、身体、衣服からなる状況的な存在として捉え、地域の風習や気候、文化との関係性を考察しています。特にインド・ヴァラナシ、チベット文化圏のラダック、ミャンマーなど、特定の地域の民族服と、その生地や糸など素材の生産技法に着目し、各地の生産者と協働しながら現代の服として体現するコレクションを発表しています。

「村の痕跡 (village traces)」と題されたこのプロジェクトは、養蚕と手織り絹の生産を続けるコミュニティである、タイ東北部・南イサーンに位置するKim-Ma-Au-Suan Mon村との協働で生まれています。この村は、蚕の餌となる桑の葉の栽培を含めた養蚕、染色や織り、販売までの循環を村内で完結して行っています。本プロジェクトでは、この村で使われなくなったスカート状の民族衣装「パーシン」や破棄予定の古着や古布、未加工の絹糸を買い取り、それらを再構成・再解釈しながら新たな服を作成しました。着用時の汚れや擦り傷、保管時の動物によるダメージなどの痕跡を、手縫いを用いながら美しく可視化しています。その服を村人が実際に着用し、それを撮影するまでをプロジェクトとしており、村人が介在することによって村の文化価値の再発見の機会を提供しています。また、ファッション産業の商業主義への批評も込められています。



YANTOR 《Rat Dress》2021
金沢21世紀美術館蔵



展示風景

エヴァ・ジョスパン/ Eva Jospin

1975年 フランス・パリ生まれ、同地在住

ジョスパンは、パリ国立高等美術学校で古典絵画を学び、細部を観察し捉える目を養いました。2002年以降に大きな厚紙や段ボールを使い始め、これを丹念に彫刻し、巨大な森を創造していくスタイルを確立します。これらの森は、自然との絆の強さの象徴であり、また、時につれ変化していく脆さをも表しています。もともと木材から作られたダンボールが木の代用品として用いられる、その奇妙さと本質的な関係性を追求しています。森の中に建築や洞窟など他の自然を組み込んでいくその作品は、彫刻であると同時に建築的な複雑さと空間スケールを持っています。ダンボールだけでなくブロンズや銅線などの金属素材や、刺繍などの新しい技法も取り入れて、いずれの技法でも、緻密で幻想的な細部の連続は見るものを魅了する力をもっています。

本作品《パラティンの森》はダンボールを彫刻した、水平に展開する森で、森の間に入り込むように洞窟が組み込まれており、もう一つ《コリントの森》は大きな岩のような形のなかに、階段や門など建築的な要素と洞窟、森が一体となったハイブリッドな彫刻で、一つ一つの形の襞から魔術的な物語が生まれるようにみえます。



4

エヴァ・ジョスパン《フォレ・パラティヌ》2019-2020
Renschdael Art Foundation
Photo ©Benoît Fougeirol courtesy Eva Jospin

オトボン・ンカンガ/ Otobong Nkanga

1974年 ナイジェリア、カノ生まれ、アントワープ在住

ンカンガは、ナイジェリアのイレ・イフェにあるオバフェミ・アウォロウォオ大学で学び、その後パリ国立高等美術学校で学んだのち、アムステルダムのDasArtsで舞台芸術の修士号を取得しました。

大地と海の絡み合いを描いた出品作の4点の大規模なタペストリーは、地球の存続が水にかかっているというエコロジカルな視点のもとに大地と水のストーリーを伝えています。一番下の《見出された深淵 (Unearthed – Abyss)》は海底を表しています。色鮮やかな魚や貝が、深い原始の海の鮮烈な熱帯の青の中でサンゴ礁に群がっています。その上に続く《見出された深夜 (Unearthed – Midnight)》は海中が《見出された薄明 (Unearthed – Twilight)》は岸辺が描かれています。魚網や海辺のプラスチックなどタペストリーの美しさの中に人間と海の関係が織り込まれています。《見出された陽光 (Unearthed – Sunlight)》では、焼け焦げたぼろぼろの木のてっぺんがローム質の土から突き出ています。自然の搾取の旅、荒廃への道を辿る一方でそれでもまだ生命の島々が存在し、希望の芽があることを示唆しています。

ンカンガは、オランダのティルブルクにあるテキスタイル博物館のテキスタイルラボと共同で、リンダウのドルニエ社が製造した最新式の非常に複雑なレピア織機を使用して、これらのタペストリーを制作しました。荒涼とした風景の周辺に広がる生命に満ちた鮮やかな世界を表すにあたり、織物の糸の存在感と美しい色彩はとても効果的といえます。織物は絵画のように精密で、縦糸の色の筋の間には、水のなかを揺らめく球体、天体、詩的なメダイヨンなどが現れ、海と人間の関係を一つの思索空間として表しています。



5

オトボン・ンカンガ
《Unearthed – Sunlight》2021
作家蔵
Photograph: Markus Tretter
© Otobong Nkanga

オラファー・エリアソン/Olafur Eliasson

1967年 デンマーク、コペンハーゲン生まれ、ベルリン在住

水や光、霧などの非物質的素材を用いて自然と人間の間を可視化してきたエリアソンは、長きにわたりエコロジーとサステナビリティに関心をもってきました。本作品《クリティカルゾーンの記憶(ドイツ - ポーランド - ロシア - 中国 - 日本 no.11,no.12)》は2020年に東京都現代美術館で開催された個展の準備過程で制作された12点のうち2点です。ドイツから日本への作品の輸送にあたり、CO2への配慮から空輸ではなく鉄道を使いました。このドローイングは、シベリア鉄道経由で他の作品が、日本に輸送される過程で、作品クレートの中、木とスチールの枠に取り

付けられたドローイングマシン、すなわち列車の動きや揺れを記録する装置によって紙の上に描かれたものです。置かれた高さによって振動が異なるためランダムな細かい線描は実に多様です。作家が「地球との協働によって描かれたドローイング」と語るようにこれは大地の起伏をひろいつつ地球とともに描いた線ということが出来ます。効率重視の資本主義に対する批評であると同時に、大地の起伏にゆっくりと触れていく人間の態度の大切さを示唆しています。



オラファー・エリアソン
《クリティカルゾーンの記憶(ドイツ-ポーランド-ロシア-中国-日本 no.11)》2020
金沢21世紀美術館蔵

フォルマファンタズマ/ Formafantasma

イタリア出身のアンドレア・トレマルキ(1983年生まれ)とシモーネ・ファレジン(1980年生まれ)によるデザインユニット。2009年結成、ミラノを拠点として活動中。

2人はオランダのデザインアカデミー・アイントホーフェンを2009年に卒業後、アムステルダムを拠点にスタジオフォルマファンタズマとしての活動を開始。約10年の活動を経て、2022年にミラノに拠点を移しました。ものにまつわる歴史や伝統と現地文化の関係をリサーチし、展示デザインやキュレーション、プロダクトやインテリアデザインなどユニークな創作活動を展開しています。

10代の頃からアートやデザインに興味があったシモーネ、工芸や歴史への関心が高かったアンドレアの2人は、アーティストックで直感的なセンスとリサーチの蓄積、そして社会に向き合う姿勢というバランスを備えています。彼らはクライアントやインスティテューションとの創造的な協働を通じて、物質的、技術的、社会的、および言語的な可能性をもつ革新的な媒介としてデザインを提案することを目的としています。本展のために選んだ3つの映像作品はいずれもエコロジー、森にかかわるものとなっています。

新城大地郎&床州生/Daichiro Shinjo, Shusei Toko

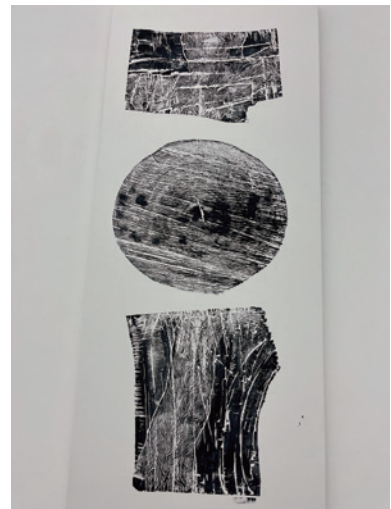
新城大地郎：1992年 沖縄県宮古島生まれ、同地在住

床州生：1966年 北海道阿寒生まれ、同地在住

新城は、禅僧であり民俗学者でもある祖父を持ち、禅や仏教文化に親しみながら幼少期より書道を始めました。禅や沖縄の精神文化を背景に、形式にとられない、軽やかで、身体性、空間性を伴ったコンテンポラリーな表現を追求しています。

本作《アンフレイムド・バショウ》は自宅近くに自生する大きなバショウの葉に墨をつけ、和紙に刷りとしたものです。抽象表現主義的な自在な墨の仕事の手つきと、宮古島の旺盛な自然力をあわせてできたこの作品は、力強さと生命力、そして自然に内包する洗練された形態を引き出しています。

北海道在住のアイヌの木彫り作家、床州生とのコラボレーションによる作品《声 Utasa 2023》は北海道の輪踊りの祭り「ウタサ祭り」の会場のシンボルとしてつくられた対の作品です。一つは端材に床が川をイメージしたドローイングを彫り込み、刷り上げた作品、もう一点は同じ版画の上に新城が泥藍で大胆なフォルムを描いたもので、エコー、声がテーマとなっています。



展示風景

ステファノ・マンクーゾ/Stefano Mancuso

1965年 イタリア、カタンザーロ生まれ、フィレンツェ在住

マンクーゾはフィレンツェ大学の教授であり、植物神経生物学の専門家です。このモノタイプは、2019年から制作を始めたシリーズです。これは、レオナルド・ダ・ヴィンチの植物から直接形をとるモノタイプを見て、植物の複雑な生を写しとる科学者の視点とその美しさに感銘を受けたことがきっかけとなっています。このプロセスの追求はすべてマンクーゾの独学によるもので、既製品の版画のプレス機を改造し、粘度の高いインクを混合、異なった種類の紙を用いてさまざまな試行錯誤を経ました。近隣の庭に自生している植物を朝に採取し、それが新鮮なうちに紙の上に配置してプレスします。植物固有の色とインクの色が混合することなどを計算にいれながら、さまざまな構図

で紙上に配置し、重ね刷りも行います。モノタイプには彼が専門家の視点でとらえた植物のたたずまい、生のありようが組み合わせや構図に反映されています。構図は植物の生態を現象学的にとらえたものもあれば、美学的で抽象的なコンポジションによるものもあります。科学的態度をもって世界をトレースする参与観察的な態度に、色彩や形に対する豊かな感性が加わってできた作品といえます。



ステファノ・マンクーゾ《アレカヤシの織模様》2023
金沢21世紀美術館蔵

アドリアン・ビシャル・ロハス/Adrián Villar Rojas

1980年 アルゼンチン、ロサリオ生まれ、同地およびニューヨーク在住

ビシャル・ロハスは、協働作業により、大規模でサイト・スペシフィックなインスタレーションを制作します。ある場所で制作した作品の部分をもとに、次の場所で別の作品に変容させていく方法は、ビシャル・ロハスの物質と時間、場所の関係についての考えを反映しています。彼は、彫刻、ドローイング、ビデオ、執筆を通して、人類の終わり、ポスト人新世について、過去、現在、未来を横断しながら探究します。《想像力の果て》は壮大な彫刻プロジェクトです。ビシャル・ロハスは数千年にわたるタイムスパンで、環境から社会現象までさまざまな状況をシミュレートするタイムエンジンというアプリを用いて時間旅行をするバーチャル彫刻を作りました。そして2021年これを現実の物質彫刻としてダウンロードすることを開始しました。ロサリオの巨大な仮設工房で

手作業とマシンインテリジェンスが組み合わさった作業により金属、コンクリート、土、ガラス、樹脂、廃車になった自動車部品、リサイクルプラスチックなど産業廃棄物など、すべての物質が生き物のように絡み合っており、有機体をつくりあげています。出品作は、4体つくられた中の最大の彫刻で、ビシャル・ロハスはこれに新たな細部を加えドラマティックにアップデートしました。《消失のシアター》は、15世紀イタリアの有名な画家、ピエロ・デ・ラ・フランチェスカの絵画「出産の聖母」をビシャル・ロハスとチームがスケールアップした複製画として描いたものです。イエスを孕ったマリアの静かで厳かな表情、腹部にそっと置かれた手に新しい生命を感じられます。フランチェスカの人物は東方的なアルカイックな表現を特徴としており、東方の文化が交流したこの時代、あらゆるものがまざりあい、胚胎されていく新しい生命への希望がこの絵から感じ取ることができます。元々オーストリアのクストハウスプレゲンスの床に展示されたこの作品は、人々がそこを歩くことによって多くの傷がついています。災害や困難にたえて生きる力を人々に届けたい、1月1日の能登半島地震で被災し、ガラスを撤去しむきだしの傷をみせている当館の天井に治癒と癒しを与える、ビシャル・ロハスの願いによりこの天井画は実現しました。



アドリアン・ビシャル・ロハス
《The End of the Imagination I》2022
Collection of the artist
Courtesy the artist, Marian Goodman Gallery,
and kurimanzutto
展示風景

AKI INOMATA

1983年 東京生まれ、同地在住

INOMATAは人間以外の生きものや自然との関わりから生まれるもの、あるいはその関係性を提示しています。ヤドカリや真珠貝、ミノムシなどそれぞれの生態を活かし、彼らとのコラボレーションによって作品を制作しています。本作「彫刻のつくりかた」は、INOMATAが5つの動物園に依頼し、ビーバーの飼育エリアに角材を設置し、ビーバーが齧った角材を集め、これを展示の形に展開したものです。ビーバーが齧った木のフォルムは美しく、ブランクシーや円空など人間のつくった彫刻のようにも見えたことから、作家は、作者性と芸術性について考えました。ビーバーは、樹木を食べ、樹木でダムや巣を作り、伸びた歯を削ります。樹木に残されたその痕跡は、あくまで「副産物」ですが、それは、木の節などの堅い部分を避けて齧った結果だとも考えられ、フォルムは、木とビーバーの関係から生み出されているともいえます。誰が行為の主体＝〈作者〉なのか、この問い

を視覚化するべく、INOMATAはビーバーに齧られた、もしくは齧り残された形を元に、彫刻家に依頼して人間大のスケール（現物の3倍）で模刻してもらいました。ビーバーがつくったものを人間が真似て作る。そこには新たな解釈が加わっていた。さらに、機械での自動切削（CNC）により複製を製作することで、さらに主体性をずらすことを試みました。展示ではオリジナルと模刻が鏡のように置かれ、木の中に巣食っていたカミキリムシの動きのホログラム映像が、台にかけられた穴から映像でみせられています。

光庭の向こう側にはビーバーの頭骨の3Dプリントと、CNC切削機のエンドミルとがその削る音とともに自然史博物館のように展示されています。



AKI INOMATA 《彫刻のつくりかた》2018–2023
(ongoing)
CAFAA賞 2020-2021年
Photo by Keizo Kioku, courtesy of
Contemporary Art Foundation

Rediscover project実行委員会

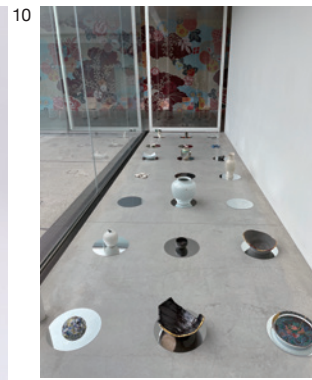
2024年立ち上げ、金沢を拠点とする

Rediscover projectは、奥山純一が主催するCACLを中心としてつくられたプロジェクトです。2024年能登半島地震により、被災した能登の九谷焼と輪島塗の工場や職人の仕事場などを救済するためのプロジェクトとして立ち上がりました。CACLは、震災以前から九谷焼の窯元が、輸送や保管中に破損した九谷焼の破片に気を止め、その可能性を模索していました。その中で起きた能登半島地震後に、二次避難をしてきた輪島塗の職人たちに、手を使い続ける仕事として、この割れた九谷焼に新たな価値を見出します。

本来は、それぞれの職域の違いから出会うことのない、九谷焼と輪島塗。その両者が震災以後に、出会うことで新たなオブジェクトとして蘇らせました。展示空間にならぶ多様な試みは、破壊が同時に創造の機会にもなり得ることを示しています。



Rediscover project
実行委員会



10
展示風景

ソーレン・ソールキア/Søren Solkær

1969年 デンマーク、スナボー生まれ、コペンハーゲン在住

ソールキアは、FAMU写真映画科卒業後プラハのアカデミーで学びました。最初、有名アーティストのポートレートなどを撮影していたソールキアは、「黒い太陽」プロジェクトをきっかけに故郷の南デンマークに戻り、ムクドリを6年間にわたって追いつながら撮影することになります。その範囲はデンマーク、イギリス、アイルランドからワッデン海沿いのオランダまで、ヨーロッパ全域に及びました。

鳥の群という現象に対する彼のアプローチは神話的かつ科学的な角度からなされています。ムクドリの大群が、他の追従を許さないコラボレーションを見せる、その統一された有機体としての動きやパフォーマンス能力にソールキアは深く関心をもっています。鳥たちが外部からの脅威に対して激しく対抗する、そのサバイバルの力から力強いビジュアル表現が生まれるとソールキアは語ります。空を背景に、書道の筆で書かれたような結露の形や黒い線、干渉波や数学的な抽象など、群の形は刻一刻と変わってきます。本展では映像《ハウトヴィール・ウォーター》《ハウトヴィール・スカイ》と写真作品《黒い太陽》によって、鳥の大群によって描かれるダイナミックな抽象画、グラフィックな線が表現されています。

マリア・フェルナンダ・カルドーゾ/Maria Fernanda Cardoso

1963年 コロンビア、ボゴタ生まれ、シドニー在住

カルドーゾは、自然、アート、科学、テクノロジーを融合させ、型破りな素材を使い、畏敬の念を抱かせるようなインスタレーション、彫刻、パフォーマンス、ビデオに変貌させます。

カルドーゾはクモ学者、昆虫学者、顕微鏡医、マクロ撮影家の協力を得て、3年間にわたって8種のオーストラリアに生息するマラトウス科のジャンピングスパイダーを撮影しました。本作《芸術の起源について I-II》はその中の2つの映像であり、雄と雌の2種をフィーチャーしています。マラトウスはとても小さく、平均して4～6ミリメートルほどしかなく、米粒よりも小さいのです。Iはマラトウス・ボランス、IIはマラトウス・スプレンドゥスの雄と雌が出演しています。

この作品では、彼らの驚くべき求愛の儀式が紹介されています。オスは、彼女に「選ばれる」ために、視覚的なコミュニケーションや魅力、忍耐力を駆使して、努力しなければなりません。メスは選ぶ権利を行使し、オスに複雑な求愛の儀式で鮮やかな色と卓越したパフォーマンスを過剰に披露させるのです。このプロセスは「女性の側の識別力と嗜好」「性淘汰」として知られており、ダーウィンがクジャクの求愛行動で初めて観察しました。クジャクや人間と同様、マラトウスも視覚に非常に敏感な動物で、自分の外見やそれが相手に与える影響を意識しています。彼らは身振りや形、色、模様を慎重に使います。彼らが互に見つめ合い、触肢や第3脚を使って微細なジェスチャーをしているのが見えます。彼らは、地面を伝わる振動も感知します。この音、タッピング音は人間の耳には聞こえないため、作家は特別なレーザー振動計でこれを録音しました。サウンド・アーティストのアンドリュー・ベレッティが、その音を超リアルなものにし、振動するものを使って触覚的な次元を加えたのです。展示においては映像の前に楕円形の台が設置され観客はこの上に立って振動を感じることができるようになっています。



マリア・フェルナンダ・カルドーゾ
《Spiders of Paradise: Maratus volans》2024
Courtesy the artist and Sullivan+Strumpf,
Sydney © Maria Fernanda Cardoso

11

アマゾンなどの
作家

アマゾン地域に住む先住民の芸術家

アマゾン地域に住む先住民の生活と文化は、長い間、彼らを取り巻く複雑な生態系との共生関係から生まれてきました。アグロフォレストと呼ばれる農耕と森の相互扶助的な共生方法と、コミュニティを一定のスケールに維持するために、人口を分散することは、いずれも森を養う知恵でした。しかし、16世紀初頭にポルトガルによる植民地支配がブラジルに到来すると、彼らの土地に対する組織的な排除、追放、搾取の歴史が始まり、それは現在も続いています。

書き文字をもたない口承文化であった彼らの生活のなかに、元来絵画表現はありませんでした。宣教師がもたらした絵画表現をとおして、彼らは自らの文化の継承および文化的政治的アイデンティティを主張し、かつ絵画を売って生活の糧とするようになりました。フェルトペンやボールペンを使って、紙に緻密なイメージを描いた作品は、森やまわりをとりまくものとの交換とつながりを表しています。これをつなぐシャーマンも重要な主題となっています。

彼らには「自然」という言葉がありません。すべてのものが「人間」でありそれぞれがパースペクティブをもっていると考えているのです。このマルチヒューマンティの宇宙観が作品のポエティクスと純度の高い緊張感を保っているといえるでしょう。

ジョゼッカ・ヤノマミ/Joseca Yanomami

1971年、ブラジル、ロライマ州カトリマニ県上部生まれ。

アマゾナス州テラ・インディヘナのワトリク（デミニ）在住。

2000年代初頭から木彫りの動物を彫り、シャーマンや神話の場面を描き始めました。彼のドローイングは、幼い頃から聞かされてきた神話やシャーマンの詠唱に登場する存在や場所、エピソードを丹念に想起させるものといえます。重要なシャーマンの息子ですが、彼自身はシャーマンではなく、古代のシャーマンの聖歌に語られる幻視に基づいて、人間や動物の姿をしたシャピリのシャーマン補助霊を描くのが一般的です。彼の絵は、シャーマン以外の人々には通常見えない物語を描き、彼の民族の宇宙観を共有し広めることを目的としています。また、ヤノマミ・ツツカラ協会から出版されたヤノマミの伝統に関する本の挿絵も描いています。



12

ジョゼッカ・ヤノマミ 《Hwei xapiri Konori apatari xapiri pë kâe wai yëi, ai xapiri pënë ihuru a tëhurupëhë hamë äriäha kôahenë pë pihi kâe yëahërae huruma. Inaha xapiri pëha kuanë yanomäe thëpë haromai he. Omoäri ani ihuru a tëhuruu makii, inaha yamakiha kurae huruni ihuru yama a haromari》2011

The Museu de Arte de São Paulo
© Joseca Mokahesi Yanomami

ジャイダ・イズベル

1979年生まれ、2021年死去。

イズベルはアーティスト、キュレーター、アクティビストとして活動しました。異なる民族の土着アーティストたちによるアートシステムの確立に貢献し、自身が「Artivism アーティヴィズム」と呼ぶ活動を行ってきたイズベルは、芸術的創造と土着の権利および土地所有権の擁護を結びつけました。オブジェやパフォーマンス、絵画やドローイングなど、さまざまなメディアを用いて、伝統的な物語やマクシ族の宇宙論に登場する多様な存在のヴィジョンを表現しました。これらのイメージは、独自の宇宙を構成しており、多様な知識と理解の把握と対話から出発して、世界の再構成と癒しの可能性を示唆しています。



13

ジャイダ・イズベル《A confissão da onça》2021
個人蔵
Courtesy of Millan,
São Paulo and Galeria Jaider Esbell
de Arte Indígena Contemporânea.
Photo: Filipe Berndt
© Jaider Esbell Estate

北西海岸先住民
の作家

カナダ先住民の芸術

カナダ先住民のなかで北西海岸先住民はロッキー山脈を隔てた太平洋岸に、イヌイットは寒さの厳しい極北部にと、対照的な環境に住んでいますが、その芸術はいくつかの共通点があるといえます。

彼らは、20世紀の後半以降、彫刻をはじめとする技術と独自の世界観を基盤にして、芸術を発展させてきました。民族誌に記載される以前から、両者はともに自らが使う生活用具や儀礼具に動物の図像や独特な紋様を施す伝統がありました。神話や説話などの口承や各種の儀礼などによって人間と動物の関係を良好に保ち、祖先からの土地との結びつきや自然のなかで生きる知恵を伝えてきました。これらの芸術は先住民運動においても重要な役割を果たし、彼らの経済に寄与するとともに、民族的アイデンティティの象徴として機能しています。多くは版画です。

イヌイット芸術では変身譚や神話、そして家族や親族のつながりなどのテーマが柔らかなポエティックな表現で表されています。オショーシアク、ブッラットの「人間のように振る舞うカリブー」は自分の中に精霊をもっていて自在に変身できるシャーマンがカリブーに変身した物語を、ジェシー・オーナックの「眠るゲビオックを守る二羽の鳥」は神話上の生き物に遭遇し、守護霊に守られながらすすむ冒険譚をシンプルで図像的な形態と透明感のある色彩で表現しています。

北西海岸先住民は迫力のある象徴的な表現、構成的でくっきりした輪郭線が特徴です。特に紋章などにつかわれるトーテム、ワタリガラス、ワシ、シャチ、オオカミなどは集団や個人のアイデンティティを示すものとしてさまざまなものに描かれました。ここでも変身は主なテーマで、万物に靈魂があり、肉体が死んでも靈魂は再生すると信じる人々にとって、神話の世界はもう一つのパラレルワールドでした。

レクチャーホール

佐藤浩一＋梅沢英樹/Koichi Sato + Hideki Umezawa

梅沢英樹：1986年 群馬県生まれ

佐藤浩一：1990年 東京都生まれ

《Echoes from Clouds》は、環境の中で知覚する感覚や、自然現象の複雑性への関心をもとにサウンドやオブジェ制作を行なう梅沢と、自然環境と産業・消費社会の関係についてリサーチやフィールドワークを行い、映像や音、香りなどを複合的に組み合わせた作品を制作する佐藤との協働により制作されました。本作は映像、音、香りで構成されたインスタレーション作品で、水によってつながる「都市と自然の関係」を主軸としつつも、背後にある社会や自然環境に潜在する不安な要素を描きだします。場面は山から都市へ水の流れを追って展開しますが、途中、河川氾濫や海面上昇によって沈んだ埋没林や、繰り返して登場する霧が、不確かさや不安を感じさせます。画面映像からずれていく梅沢のフィールドレコーディングの音もしかりです。佐藤は資生堂と共同して「Mist from artificial lake (人工湖からの霧)」と名付けられた「消毒された冷たい水」をイメージした香料を開発しました。これは浄水場や人工湖など都市に来る途中で消毒され人工化していく都市の水をイメージしています。会場空間にただよう香りは、私たちにとっての「自然」の水とは何かを考えさせます。

交流ゾーン

[プロジェクト]

アニメ・レイヴ 存在の交差点で踊る

無生物、植物、動物、そして人間それぞれ異なる存在は、その違いゆえに補い合い、ひとつの生命の網を編み上げています。日本の霊長類研究の先駆者である今西錦司（1902-1992）は、生命とは一つの存在から分化し、現れる構造の連なりであると語りました。私たちが直面する環境問題への深い理解もまた、人間と自然を対立させるのではなく、動植物、微生物、原子レベルの物質、そして長い時を刻む鉱物やサンゴなど、自然と人間の”あいだ”の移行行くすべての「アニメ」と、言葉を介さないコミュニケーション（応答・交換・生成）を通じて得られるものです。

金沢21世紀美術館と総合地球環境学研究所（地球研）が協働するこのプロジェクトでは、アートを媒介とし、異なる存在との”あいだ”に出現する身体を通じた共感関係の構築を試みます。研究者たちもまた、アーティスト同様に鋭敏な感性を持ってフィールドに出向き、そこで得られる気づきや感動は、論文という形では伝えきれないものが少なくありません。このプロジェクトは、そうした研究者の探求の喜びと感動を、言葉を越えたアートとして表現し、共有することを目指します。地球環境を単なる知識として捉えるのではなく、そこに生きるすべての存在との繋がりを感じ、研究者・アーティスト・建築家・キュレーターがそれぞれの視点を交差させつつ創作の方法を探求してきました。地球研のいくつものプロジェクトから、土／島と水／サンゴの三つのキーワードを取り上げて、多様なアニメとの共存を確認し合う作品とそこから生まれる対話を、期間中の変容するインプログレスな形で育てていきます。生命の持つ共鳴と狂騒に身を委ね、存在が交わる場所で、ともに踊りませんか？

総合地球環境学研究所

総合地球環境学研究所（地球研）は、2001年に京都府京都市に創設された国立の研究所です。地球環境問題を「人間 humanity」と「自然 nature」の関係はどうあるべきか、という広い意味での人間文化の問題として、文理融合の研究により根本からとらえ直そうとしています。研究者は研究室に留まらず、世界中のフィールドに出ていき、社会の人々と協力して課題をあぶり出し、新しい枠組みと解決方法を見出すために活動しています。

地球研では、国際公募により提案された研究を、3～5年間の研究プロジェクトとして実施するプロジェクト方式で推進しています。これまでに43の研究プロジェクトが研究を終了しており、現在9つの研究プロジェクトを進めています。

アニメ・レイヴ/クレジット

総合地球環境学研究所 | 山極壽一、阿部健一、吉川成美有機物循環プロジェクト | 大山修一

Sustai-N-ableプロジェクト | 林健太郎

LINKAGEプロジェクト | 新城竜一、高橋そよ、久保慶明、安元純

ScENEプロジェクト | 渡邊剛、山崎敦子、重定菜子

参加アーティスト | 保良雄、澤崎賢一、ガラージュ、藤枝守

建築家 | 能作文徳、常山未央

キュレーター | 長谷川祐子、本橋仁

協力 | 総合地球環境学研究所（上廣環境日本学センター）三菱ケミカル株式会社

[ワークショップ]

マヤ・ミンダー

広報用画像

画像1～13を広報用にご提供いたします。ご希望の方は下記をお読みの上、当館プレスルームの画像提供ページからお申し込みください。

https://www.kanazawa21.jp/form/press_image/

[使用条件]

※広報用画像の掲載には各画像のキャプションとクレジットの明記が必要です。

※トリミングをご遠慮ください。作品が切れたりキャプション等の文字が画像にかぶったりしないよう、レイアウトにご配慮ください。

※情報確認のため、お手数ですが校正紙を広報課へお送りください。

※アーカイヴのため、後日、掲載誌（紙）、URL、番組収録のDVD、CDなどをお送りください。以上、ご理解・ご協力のほど、何とぞよろしくお願いいたします。

関連企画

「音の風景—めぐる、たどる、はせる—」

NHKでは1985年に放送開始したラジオ「音の風景」の制作をはじめ、日本や世界各地でさまざまな「音」を録音・保存してきました。日々の暮らしの風景や祭りの活気、多様な生き物たちの息吹、絶えず変わりゆく大地の姿をとらえた音の記録は10万点を超えます。

NHK金沢放送局では、「すべてのものとダンスを踊って—共感のエコロジー」展に連動し、石川県や北陸地方で収録した音源を含む“自然との共生”をテーマに選んだ100の音源を体感できるインスタレーションを展示します。

会期：2024年12月3日（火）～2025年3月16日（日）

※休場、公開時間等は、金沢21世紀美術館の開館予定に準じる

会場：金沢21世紀美術館 マイケル・リン作品前休憩コーナー

入場料：無料

主催：NHK金沢放送局 076-264-7001（平日：午前10時～午後6時）

協力：金沢21世紀美術館

「音の風景」番組ホームページ <https://www.nhk.jp/p/oto/rs/5P6KW7QL6X/>

連携企画

もっと踊ろう!共感のエコロジー

展覧会「すべてのものとダンスを踊って—共感のエコロジー」と、同時期に開催される「エコロジー」「共生」「感性」といった本展と同じテーマをもった展覧会やワークショップ、トーク、パフォーマンスなどのプログラムを繋げ、「もっと踊ろう!共感のエコロジー」と呼び連携企画として位置づけます。北陸3県内で開催、またはインターネットを利用して誰もが参加できる下記のプログラムが登録されています(申込み順)。

**消えつつ 生まれつつ あるところ**

会期：2024年10月19日(土)～11月18日(月) 12:00～18:00

期間内の土曜日・日曜日・月曜日のみ

会場：金沢市菊川2丁目14-3 イクヤマ家ほか4か所

主催：特定非営利活動法人綴る

<https://www.tsuzuru.org/APTIVWBB/about.html>

危機の時代における共感と菌糸体のダンス

会期：2024年12月8日(日) 11:00～12:00

会場：オンライン (Zoom)

主催：Tomo Sone Dance Projects

<https://peatix.com/event/4161055/view>

SATOYAMA —森と人の、美しい関係から—

会期：2024年月11月21日(木)～24日(日) 11:00～18:00 予定

会場：Oz studio 渋谷(渋谷区東1-25-5 フィルパーク渋谷東3F)、富山ガラス工房WEBサイト(オンラインショップ展示・販売)

主催：富山ガラス工房

<https://toyamaglass.com/archives/exhibition/satoyama>

一本杉復興マルシェ

会期：10月6日、11月3日、12月1日 11:00～14:00

会場：花嫁のれん館(石川県七尾市馬出町ツ部49)

https://www.instagram.com/ipponsugi_marche/

復元と更新/一本杉通りの記憶と新たな未来をつなぐ模型プロジェクト

会期：2024年9月25日(水)～未定 9:30～16:00

会場：花嫁のれん館(石川県七尾市馬出町ツ 部 49)

主催：岡田翔太郎建築デザイン事務所

<https://www.shotaro-okada.com/>

ゲッコーパーレード 家を渉る劇vol.6 野外演劇『バイオマス・マクベス』

会期：2024年11月17日(日) 11:00開演/15:30開演

会場：岡山県真庭市内のバイオマス関連施設 ※作品関連映像の事前オンライン配信あり

主催：「森の芸術祭 晴れの国・岡山」実行委員会

企画：家を渉る劇/本橋仁、黒田瑞仁、渡辺瑞帆

<https://forestartfest-okayama.jp/>

<https://geckoparade.com/whats-on/>

文化的景観研究集会「風景を耕す、その喜び」

会期：2024年11月16日(土) 13:00～17:45

会場：独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所(奈良県奈良市二条町2-9-1)※オンライン配信あり

主催：主催：奈良文化財研究所 文化遺産部 景観研究室

<https://www.nabunken.go.jp/fukyu/event2024.html#research06>

金沢工大ミライバ2025～未来をつくる学びの場～

会期：2025年2月15日(土) 13:00～17:00

会場：金沢工業大学ライブラリーセンター(石川県野々市市扇が丘7-1)

主催：金沢工業大学ミライバ事務局(プロジェクト教育センター)

<https://www.instagram.com/miraiba.official/>

NESTINGはくい

会期：2024年10月5日(土)～12月末の土日祝 9:00～18:00

会場：羽咋市内

主催：VUILD株式会社

https://note.com/numada_shiori/n/n8fde14a38f05

長土堀三軒長家

会期：2025年1月(曜日を決めて開催の予定)

会場：長土堀三軒長家(金沢市長土堀2丁目2-20)

主催：長土堀三軒長屋

https://www.instagram.com/nagadohe_nagaya/